

史的かなづかいは、「読むかなづかい」として、少なくとも理解し得るだけの教育は授ける必要がある。したがって国民教育の適當の時期において、歴史的かなづかいが教えられることはいうまでもない。

かように現代かなづかいは、現代人が現代語を書きあらわすためのかなづかいとして、積極的意味を持つものであり、歴史的かなづかいは、国民教養として、古典および従来の文献を読むためのかなづかいとして、消極的意味を持つに至るであろうと思われる。

新かなづかいの書き方についての諸注意

新かなづかいは一くちに発音かなづかいと呼んでもあやまりではないくらいに、大体、発音の通りに書けばよいのであるが、しかしやはり一種の約束であるから、それには若干の勉強が必要である。それについて注意すべきことがらを左に述べる。

一 「は・へ」と「を」

新かなづかいでのいちばん大きな要点の一つは、これまでのかなづかいで語頭以外の「はひふへほ」を「ワイウエオ」とよんでいたことをやめて、「ワイウエオ」と発音するものはすべて「わいうえお」とかくようにしたことである。

例 かわ川^{カハ} かい貝^{カイ} おもう思^{オモ}フ うえ上^{ウエ} かお顔^{カホ}

例外は助詞の「は・へ」だけである。

例 私は 私には 私では

こちらへ あちらへ

【問】 「さえ」はなぜ「さへ」としないのか。

【答】 これは「添^ツへ」から来たもので、一音の「へ」とは別である。（一音の「へ」は「方^ヘ」から来たものと考えられている。）

【問】 「では、きょうはこゝまで。」などの「では」は副詞化している。これは他の副詞の「あるいは」「もしくは」などとともに「わ」でよいか。

【答】 それはたしかにいちおう筋の通った話であるが、さて「は」をのこした過渡的処置の精神に照らして考え直してみれば、やはりこれらにも「は」をのこしておくのが穩当であろう。

【問】 助詞も早く「わ・え」に統一してはどうか。

【答】 公論の帰するところがそこにあればもちろんそうしたい（特に「へ」は最も力がよい）。新かなづかいの例則に「は・へ」を「本則とする」としてあるのは、実はその辺の含みを持たせてあるものと解してよい。

「を」は必ず「を」とかく。これは一種の分ち書きの作用

をなしているから、将来も「を」一本でゆくはずである。

二 「大きい」などのかき方

語頭以外で「オ」とよむ「ほ」を「お」とかく結果、「う」を用いる長音のかき方とまぎらわしいことがある。そこで、この「お」をつかう基本的な語例を左に列挙しておく。

おお 大^{オホ}
おおきい 大キイ^{オホ}
おおさか 大阪^{オホサカ}
おおやま 大山^{オホヤマ}
おおい 多イ^{オホ}
おおよけ 公^{オホヤケ}
おおよそ 大凡^{オホヨソ}
こおり 氷^{コホリ}
ひやしごおり
こおり 郡^{コホリ}
こおりやま 郡山^{コホリヤマ}
こおる 凍る^{コホ}
こおろぎ
しおおす 為遂ス^{シオホ}
とお 遠^{トホ}
とおい 遠イ^{トホ}

おおう 被フ^{オホ}
おおい 被^{オホヒ}
おおかみ 狼^{オホカミ}
おおせ 仰^{オホセ}
おおむね 概^{オホムネ}
とおる (とおす) 通ル^{トホ}
とおり 通^{トホリ}
みとおし 見通シ^{ミトホ}
とゞこおる 滞ル^{トヅコホ}
とゞこおり
ほお 頬^{ホホ}
ほおべに
ほおえみ
ほお 朴ノ木^{ホホ}
ほおずき
ほのお 炎^{ホノホ}

とおとうみ 遠江^{トホタフミ} もよおす 催ス^{モヨホ}
とお 十^ト もよおし
以上、すべてオ列のかなにつくものである。なお「十」だけが旧かなづかい「トヲ」である。

三 『アフ』の発音分化

これまでのかなづかいで『アフ』と書いたのが、その発音の分化にともなつて「あう」「おう」「あお」の三つにかき分けられる。

(旧) あふ

あう例 あう 合フ あらう 洗フ^{アラ} おこなう
おう例 おうぎ 扇^{アフギ} おうさか 逢坂山^{アフサカ}
おうみ 近江^{アフミ} (それで遠江が遠江とな
るのである)
あお例 あおい 葵^{アフヒ} あおぐ 仰グ^{アフ} 扇グ^{アフ}
あおる・あおり たおれる (たおす)
倒レル^{タラ}

四 標準発音の問題

「頬」の発音はこれまで一般に「ホオ」といつてきたが、近ごろは文字どおりに「ホホ」という言い方が新生層の間にふえてきた(放送で親しみのある人で例をいえば市川八百蔵が「ホオ」で夏川静江が「ホホ」である。)もし「ホホ」を、

(またはをい) 標準語とみとめることとなれば、新かなづかいでも「ほ」とかくことはもちろんである(「ほゝべに・ほゝえみ」など殊にそうである)。

こうした例は、なお、伊香保(地名)の保の字のよみ方などにもあるが、それよりもずっと大きな問題は、ほとんど日本全国の半分にもわたっている次のような動詞の発音のちがい(まちがいではなくてちがい)である。

【例】洗う

- (一)「アラウ・アラツテ・アラッタ」
(二)「アロー・アローテ・アロータ」

現代の標準語としては(一)の方をとっているから、したがって新かなづかいでも「あらう」とかくこととなる。

これまでのかなづかいでは「あらう」でなくて「あらふ」であるというところに力点があつたのであるが、これからは「あらう」であつて「あらう」でないというところに注意しなくてはならなくなった。すなわち、かなづかい以前、いながら同時の問題として標準語の発音の問題が新しく登場したのである。それで、新かなづかいの普及の仕事はたゞちに標準語の普及の仕事ともなるのであるから、一言、こゝに付記しておきたいことがある。それは、標準語の普及とは、いわゆる方言をためなすことや方言をなくすることではなしに、方言とは別に、あらたに標準語の体系を、まず国民の頭の中に

うえつけることだということである。

こゝで、右の「洗う」と同じ動詞の語例を少しあげておく。
あう合・会　ならう習　あつかう扱　かう買　ねがう願
おこなう行　うたう歌　はらう払　とりあつかう　しま
う了　わらう笑　とりはからう

【注意】「拾う」は「ひろう」である(現代の標準語としては「ひろう」でない)。

なお、標準語では次のような動詞の語尾も「ウ」とよむ。

追う「オウ・オツテ」　思う「オモウ・オモツテ」
沿う「ソウ・ソツテ」　誘う「サソウ・サソツテ」

たゞし文語の朗読では長音によむし、また例えば「責任を問うて」とか「承認を請うて」とかというような文語的語句でも長音によむ。

五 「言う」と「結う」

「言う」は「結う」と発音上の区別を普通にはしていないが、主として文法上の考慮から「いう」とかくこととなつたのである。それで活用と発音との関係が次のようになる。

【言】　いわ　ナイ　いい　マス　いう　いう　い　え　バ
いえ　い　おう

【問】　これに準じて考えれば「宜しゅう」なども「宜しう」でよくはないか。実際の発音でも「シウ」と「シユー」

との中間的なものである。なお、これまでの字音かなづかいで「宮・中」などの「ゆ」はすべて省略してよいということとなっていることも参考となろう。実用的にも許容されたいと思うがどうか。

【答】 その語が正しく認められるために必要で十分な程度において、大体の発音を示せば足りるとするのが正字法精神であるから、大多数の公論がそういうことであるとすれば大いに考慮の余地がある。実用的には電報などでは公にそうかくこととなっている（例えば「シキウ」至急「ヒウガ」日向などのように）。

【問】 「柳生・桐生」などは「やぎう・きりう」でよいか。

【答】 それでよい。実際の発音は「ギウ」と「ギュー」との中間的なものであるが、音韻観念としては「やぎう」であろう。しかし、一般に「やぎう」と「やぎゅう」と、どちらのかき方がよいという意見が多いであろうか。

六 「生命」などのかき方

字音（漢語）の「生・命・例」などのかき方はこれまでの通りである。ただし、それだからといって発音も「セイ・メイ・レイ」などに限るというのではない。たとえば「明治」は、その音韻形式（すなわち語形）として頭の中にあるのは

「めいじ」であるが、実際の発音（すなわち口頭の実現音声）としては「メイジ」から「メージ」にいたるまでの無限の幅を認めるというのが現代の標準語意識である。

【付記】 「水・追」などの「ヰ」はすべて「い」とかく。すなわち「すいえい」水泳など。

七 つまる音と拗音のかき方

つまる音をあらわす「つ」と、拗音をあらわす「やゆよ」とは、原則として小がきにする。それで、入門にはそう教えておいて、次第に同じ大きな字でかいてあっても正しくよみ得るように導いてゆくべきである。

例 きょうきょう今日 がっこうがっこう学校

【注意】 石けん・撃剣・敵艦などはつまるが、貝原益軒・適格・敵艦・易経などはつまらない。（それは単に母音が無声化するだけであって、言わば半促音である。）

「勉強しよう・運動しよう」などの「しよう」を「しょう」と発音しないように注意を要する。

【付記】 助動詞の『マセウ・デセウ』は「ましろう・でしろう」と書くのである。

八 「か・くわ」の区別

家事と火事、自我と自画像などの区別は、現代の標準語意

識ではなくなっているから（将来の全国的な見通しも漸次になくなる方向にあると認められている）、おとなはともかく、子供にはその区別を要求しない方がよい。たゞし、それを区別してかいても誤りとはしないというのが例則最後の「注意」の主旨である。

九 連声のかき方

新かなづかいの大方針によって、次のようにすべて発音の通りにかく。

例 化学反応 はんのう 感応 かんのう 正三位 さんみ 三位一体 さんみ 天皇 てんのう 天王寺 てんのうじ

【注意】 第三位・単位 たんい の数などの場合には連声しないから、もちろん「い」である。

十 「ち・づ」のかき方

国語には、ハッキリと「じ・ず」と「ち・づ」との区別がわかっているものと、そうでなく、ぼんやりとしていて「じ・ず」か「ち・づ」かわからないようなもの（すなわち中性的なもの）とがある。その後の方の者を便宜に「じ・ず」に統一してあらわそうというのが新かなづかいの通則の精神である（実は第三のかなを用いるのが学問的には正しいのであるが）。

例 ふじ（藤） フジ 恥じる（恥ヂル） ミヂル みじかい（短イ）
みず（水） ミヅ あずき（小豆） アヅキ はずかしい（恥カシイ） ハヅカシイ

そして前の方の者を「じ・ぢ」「ず・づ」とかき分けようとするのが「たゞしがき」の精神である（それが国民の国語意識として自然なのである）。

例

島 しま はなれじま 刷 す る…手ずり
血 ち …はなち 釣 つ る…手づり

なお、同音の連呼によって生ずる連濁もこの例によってかき分けるのである。

例

しづみ すづめ すづむ
ちづみ（縮） つづみ（鼓） つづく（続）

ところで新かなづかいの例則には、二語の連合によって生じた「ち・づ」は「ち・づ」とかくとあるのであるが、さてその二語という語の解釈の広狭によって、あるいは「ち・づ」と「じ・ず」とのどちらをかいてよいか、疑問のおこるものがある。その場合に、ある人は「じ・ず」とかき、ある人は「ち・づ」とかく。しかし、それは当分の間は二つとも誤りでないと認めておいて、やがて数年の間に自然におちつくのを待つべきである。その間に実験的研究や公論の調査などをも大いに進めてゆくべきであるが、それについて一つの大切な心がまえは、国語は国民の国語であるという自覚をあらたにして、各種の問題に関する解決を当局者にのみ依頼せず、すべては自主的・批判的に、しかも建設的な態度をもって、

この新かなづかいの完成に国民的に協力するということである。

〔後記〕これまでのかなづかいにはカタカナをもちい、

必要に応じて漢字をもまぜてもちいた。

発音符号にはカタカナで「」をもちい、その
中で特に音声符号に対する音韻符号としてあら
わすのにはひらがなで「」をもちいた。

現代かなづかいと文法

国語の文法は、現代かなづかいの制定実施によって、その説明を改めなければならぬ部分を生じた。もとより話されることばの体系は、かなづかいの変革によって変化するものではないが、今日までの文法は、主として文字に書き表わす場合の規準について記したもの、むしろいわゆる歴史的かなづかいの用法を説くのが第一の目的であるかのように取り扱われてきたものであるから、文法教授の必要は、もはや大半失われたと考える人もないとは限らない。しかし、ことばの実態をつかむために、新しいかなづかいの制定が、よい機会を与えているものであることは言うまでもなく、したがって新かなづかいによる文法の説明は、国民の国語に関する教養を高めるために、かえってその必要をましたとも言いうことができよう。それを言わないまでも、旧かなづかいで文法を学

んだ人にとって、これから後、その知識を適用させることのできない点をわきまえて、その改訂に文法的な道をつけておくことは、じじつ当面の問題であるにちがいない。できればこの際、旧かなづかいの立場をいちおう離れて、全くあらたな体系を考えることが望ましいのであるが、ここにはなるべく、これまで説かれた文法体系の中で改めなければならなかった点を指摘するにとどめておこうと思う。

文法でかなづかいが問題となっていたのは、主として活用語の活用語尾であるが、活用の体系を旧かなづかいで支えていたものは、いわゆる五十音図であるから、一種のかな表と見られるこの五十音図をまず改訂することが必要である。第一に、現代かなづかいによるとまったく用いられることのないワ行の「ゐ」「ゑ」の二字を取り去って、その代りには「い」「え」を補わなければならない。そしてまた、「を」は助詞として用いられるだけであるから、これをかっこに入れて「お」を掲げておく。すなわち、「わ・い・う・え・お（を）」をワ行と考えることとする。これが最小限度に必要な五十音図の改訂で、これによると、五十音図の中には「い」「え」がそれぞれア行ヤ行ワ行の三箇所、「う」「お」がそれぞれア行ワ行の二箇所に出ることになる。なお、清音のかなだけでなく、濁音のかなをもあわせ掲げておくと便利で